

吉備における東征の足跡

白崎 勝

(著・たかとりが明かす日本建国)

はじめに

吉に備えると誰が名づけたか、吉備とは良い名である。黍がたくさん採れたからとも言つ、その由来は、東征のあかつき「ひのもとの大倭」、建国の吉に備えたクニの、表現なのかもしれない。

調べると岡山の由来は、市内を流れる旭川の右岸に天神山・石山・岡山の三つの丘があり、その岡山に城を築いたからとある。分かりやすい由来であるが、なぜそこに天神山や岡山があつたかまでは分からない。天神山とは高天原の神・天津神がここにやって来たことを遺した山名で神武東征、東進中の命名と考へる。石山や岡山も同時に名づけられたのだろう。岡山県には百近い岡とつく地名が遺されている。

まず天孫降臨に遡る「岡」の由来について、お話しする。

此地は韓国に向ひ

有力な天孫降臨の候補地は、宮崎県臼杵郡の高千穂町と霧島の高千穂峰である。詔に『此地は韓国に向ひ』とあることから、博多湾岸の説もある。

地図1は神武東征の経路を調査する中で見つけた、



地図1 魏志が記す行程の方角

宍岐と唐津にある高尾山を、直線で結び北と南に延長した図である。狗邪韓国から遠く高千穂峰に続く直線が見つかった。さらにその先は壁（へき）が見つかった串間市で、奇し土地柄への名づけである。

この直線上には人吉市の高尾山もあり、偶然の名づけで無いことがわかる。この直線は152度の角度で、夏至の日の出方角62度との差は90度である。夏至の日の出方角を東としたときの、南に向く直線といえる。

魏志倭人伝は対馬国から一支国への東南に向かう渡海を、「また南に一海を渡る」とこの152度の方位を南と記している。そこで上陸後も、この基準で行程の方角を記録し続けたのだろう。このことが、その後の混乱を招いた。「東南伊都国」「東南至奴国」「東行不弥国」が有力候補地と一致する。さらに、平行線を引いたように、不弥国から「南至投馬国」の西都市、「南至邪馬台国」の朝倉市、「其南狗奴国」の菊池市の全てが152度を南とする線上にある。

邇邇芸命は狗邪韓国から高千穂峰に続く、この奇跡の直線を知っていて、詔の『此地は韓国に向ひ』の一言を発したのである。そして高千穂峰から狗奴韓国方向にある山に、韓国岳と名付けたと推測する。また高千穂峰の東に当たる西都原を、朝日の直刺す国、薩摩の阿多付近を夕日の日照る国と表現したのである。

高千穂峰

高千穂峰に登ったことがある。記紀に記す高千穂峰から浮島にいたる表現が、登山経路地形と良く一致していることに気づいた。付近の地図を載せる。

・天の浮橋 邇邇芸命は雲海の中の高千穂峰に立ったのであろう。遠くの花々
が島のように見えて、霧島と名づけたと考へる。高千穂峰から降りるときは、お鉢に登り返す鞍部を通る。鞍部(背門)丘の両側が霧の海となつていて浮橋に見えたのだろう。



地図2 高千穂峰付近の地図

・二上峯 お鉢は高千穂峰に添うようにある火口である。添(そぶり)の山峯という表現も当たっている。また登山口から見ると、両端が高くなっている。二上山のように見える。

・梯子 お鉢からの下山道では、後ろ向きに岩に掴まりながら降り、その姿は梯子を降りるに似ている。

・浮島 登山道入口にある神籬(ひもろぎ) 斎場は平地になっていて、霧の中を下りてきたとき、浮島に見えたのだろう。浮島平の表現も納得できる。

頓丘(ひたおか)

日本書紀は高千穂峰からの経路を、『そ穴の空国を、頓丘から国覓(ま)ぎ行去りて、吾田の長屋の笠狭(かささの) 碕に到る。』と記している。この頓丘を現代訳では「丘続きに歩いて」としている。これを現実に考えてみた。当時、山に名前も無い時代なので、山々に丘という名を付けながら進んだと解釈した。国土地理院地図で調べてみると北海道を除く全国で53の丘と岡という名の山が見つかった。その内、46までも南九州に集中していた。

これを地図3に示す。
高千穂峰から笠沙の野間岬に向かって、岡または丘と付く名の山が続いている。野間半島から鹿児島湾を渡り大隈半島を巡り、逆「の」の字型の経路は、八代海の獅子島で終わっている。21, 22, 23の直線や39, 40, 41の矢印型の配置は、『朝日の直刺す国、夕日の日照る国』を強く意識した配置であることが分かる。



地図3 南九州の岡または丘と名が付く山の分布

表1 全国の丘と岡の名がつく山

| 番号 | 名称 | 所在地 | 番号 | 名称 | 所在地 | 番号 | 名称 | 所在地 |
|----|-------|-------------|----|------|------------|----|-------|---------|
| 1 | 国見が丘 | 宮崎県西臼杵郡 | 19 | 餅ヶ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 37 | 陣が岡 | 鹿児島県曾於市 |
| — | 母智丘 | 宮崎県都城市 | 20 | 劔ノ岡 | 鹿児島県始良市 | 38 | 大野岡 | 宮崎県都城市 |
| 2 | 虎ヶ尾岡 | 鹿児島県霧島市 | 21 | 牟礼ヶ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 39 | 霞ヶ丘 | 宮崎県西諸県郡 |
| 3 | 文字岡 | 鹿児島県霧島市 | 22 | 牛頭野岡 | 鹿児島県日置市 | 40 | 土然ヶ丘 | 宮崎県小林市 |
| 4 | 二牟礼岡 | 鹿児島県霧島市 | 23 | 甚九朗岡 | 鹿児島県南さつま市 | 41 | 霞ヶ丘 | 宮崎県小林市 |
| 5 | 雨祈岡 | 鹿児島県霧島市 | 24 | 乗越の岡 | 鹿児島県南さつま市 | 42 | 城ノ岡 | 宮崎県小林市 |
| 6 | 丸岡 | 鹿児島県霧島市 | 25 | 西の丘 | 鹿児島県南さつま市 | 43 | 八幡丘 | 宮崎県えびの市 |
| 7 | 鏡ヶ岡 | 鹿児島県霧島市 | 26 | 亀ヶ丘 | 鹿児島県南さつま市笠 | 44 | 鷲巣丘 | 鹿児島県伊佐市 |
| 8 | 貝吹岡 | 鹿児島県霧島市 | 27 | 辻風岡 | 鹿児島県南九州市 | 45 | 鳥神岡 | 鹿児島県伊佐市 |
| 9 | 茶屋ヶ岡 | 鹿児島県さつま町 | 28 | 横堀の岡 | 鹿児島県肝属郡 | 46 | 黒崎丘 | 鹿児島県出水郡 |
| 10 | 有年ヶ岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | 29 | 陣ノ岡 | 鹿児島県鹿屋市 | 47 | 城ヶ岡 | 兵庫県三田市 |
| 11 | 田原丘 | 鹿児島県さつま町 | 30 | 霧島ヶ丘 | 鹿児島県鹿屋市 | 48 | 雙ヶ岡 | 京都市右京区 |
| 12 | 弥三郎ヶ岡 | 鹿児島県さつま町 | 31 | 草野丘 | 鹿児島県曾於郡 | 49 | 石堂ヶ岡 | 大阪府豊能郡 |
| 13 | 須杭岡 | 鹿児島県さつま町 | 32 | 宇都丘 | 鹿児島県志布志市 | 50 | 天檜丘 | 奈良県高市郡 |
| 14 | 小毛野岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | — | 勿体岡 | 鹿児島県串間市 | 51 | 君ヶ岡 | 宮城県刈田郡 |
| 15 | 今村岡 | 鹿児島県薩摩川内市 | 33 | 岳野丘 | 鹿児島県志布志市 | 52 | 陣ヶ岡 | 岩手県紫波郡 |
| 16 | 火立ヶ岡 | 鹿児島県いちき串木野市 | 34 | 登見ノ丘 | 鹿児島県鹿屋市 | 53 | 迦陵嚩伽岡 | 岩手県一関市 |
| 17 | 陣ヶ岡 | 鹿児島県いちき串木野市 | 35 | 狐ヶ丘 | 鹿児島県鹿屋市 | | | |
| 18 | 鷲ヶ岡 | 鹿児島県鹿児島市 | 36 | 惣陣が丘 | 鹿児島県霧島市 | | | |

この岡や丘の配置や名前には、古代人の心が、託されていると考える。気がついたところを幾つか挙げる。

- 1、牟礼は岡の意味であるが、牟礼ヶ岡の名がある。岡の中の岡の意味か、幾つもの経路が牟礼ヶ岡を指している。
- 2、岡と丘が混合しているが、丘の数は1, 2, 3, 4, 3, 3, 2, 1となっている。最初の田原丘の前に有年ヶ岡を配置して、母智丘から田原丘まで一年を有したと記録している。この天孫降臨は七年を要したことが分かる。
- 3、大隅半島の曾於市付近には、弥五郎どん巨人伝説が残されているが、名の良く似た弥三郎ヶ岡がある。弥五郎どんは猿田彦のことと考える。
- 4、宇都丘が大隅半島にあるが、宇都の地名は、南九州に集中している。訪ねると、皆、谷奥で谷水による灌漑稲作を伝えたところだった。

神武東征と岡

神武天皇は、邇邇芸命が岡と丘の名の山を、残したことを知っていたことが分かる。東征の途次、「岡之水門」や「岡田宮」の名前を残している。そして東征最後の地点の橿原に、区切りの丘を使った「天樞丘」を残している。邇邇芸命の心を今実現したとの思いがあったのだろう。混乱を避けて、東征途中の山には丘を付けないで、最後の地点に名づけている。

倭国連合

筑紫の高天原の天照大御神から、日嗣の印の三種神器まで授けられて降臨した邇邇芸命である。それから四代目の神武が、東征にあたり筑紫の人達と力を合わせることは、必然な行動と言える。古事記も記している。「日向より撥たして筑紫に幸行でましき。」と一言であるが、豊国の宇沙に到る前、筑紫に出向いていたと記している。

神武東征が筑紫と連合した説を見ないのは残念である。筑紫と一字異なる筑紫の岡田宮に一年とどまる記録も、筑紫の人達とともに右舟を準備したのであれば、納得できる滞在である。

天孫降臨でその経路を「丘や岡」の名前で遺したことを知っていた神武が、重要なこの東征の行動を地名や山名に遺さないはずがない。

全国の高取山・鷹取山は東征のベクトルだった

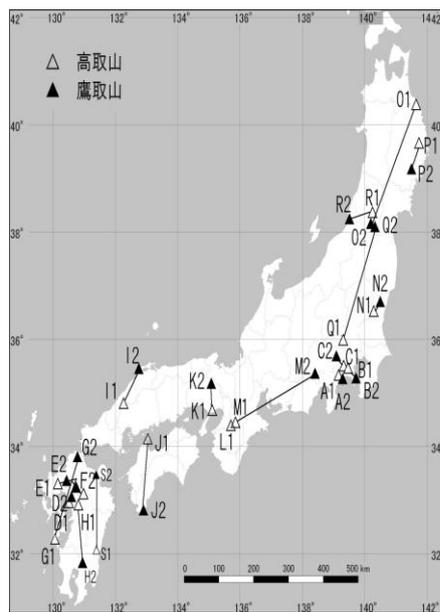
東征の経路に、「タカ」型地名が沿っていることを発見したのは井上超夫である。東征で灌漑稲作を伝えたところに、豊後高田・安芸高田・熊野高田などを遺した説である。岡山県では総社市・赤磐市・真庭市・津山市・矢掛町に高田はある。岡山市内では榎築遺跡の麓を流れる足守川添いにある。付近は古代吉備の中心部である。

同じ「タカ」型の高取山・鷹取山が、東征隊が進んだ方向を表すベクトルで、高尾山や○尾山がこれを補佐しているのを見つけた。○には異なる文字が入る。高倉山・○倉山・高城山・高塚山と山のみでも「タカ」型は実に多く、東征の足跡はあふれている。

地図4に全国の「たかとり山」をプロットし、対

と思われる山を結んだ。偶然の配置でないことは明らかである。奈良より西が神武東征で、東は日本武尊東征である。二つの東征が同じ方法で遺されているので、一連の建国の事業と認識していたことがわかる。

九州の「たかとり山」の位置を拡大して図5に示す。6対のベクトルがあり、内3対で朝



地図4 全国のたかとり山



図5 九州のたかとり山

倉に三角域Tを形成している。ベクトルFは反対に延びる点線のように、日向に延びていて、神武兄弟が高千穂宮で東征を相談した後、Tに向かった足跡と考える。古事記が記す筑紫への行幸である。高天原があったのだから。ベクトルが短いのは、多用の混乱を避けるためか、倭国の領域を意識したものでしょう。

ベクトルDとEは筑紫平野の人々が、Tに向かい集まったことを記録している。直方市の鷹取山に延びるベクトルGは、天草や島原の人々がT付近で合流した後、岡田宮方向に進んだ本隊を示している。この本隊のことが記紀に記されていないため、その後の議論を生んできた。東征の中に亡くなった、長兄の五瀬命の隊だったため記載が無いのだろう。

ベクトルHは、東征を決めた神武が筑肥山地を越え、生まれ里の高千穂峰山麓に一旦戻った事を示している。東征の準備だろう。狗奴国がこのとき滅んだことは後の研究で判明した。ベクトルSは、西都原の高取山から宇佐神宮の南西にある鷹取山に延びていて、記紀が記す東征最初の行程である。西都原を出発したことが分かる。

倭のクニグニは東征に参加した

倭のクニグニが東征に参加したことが記録されていた。図6では北九州の「たかとり山」分布に「○尾山」を追加した。「○尾山」の中でも「高お山」は特別に意識された山で全国に56と数が多い。先に述べた一支国の老岐と末櫛国比定地の唐津に「高尾山」が見つかる。伊都国比定地の糸島市は、同じ「タカ」型地名の「高祖山」があって、「世王在り」「一大率」がいたと記すように、特別な国であることが分かる。

奴国・不弥国付近には大宰府市

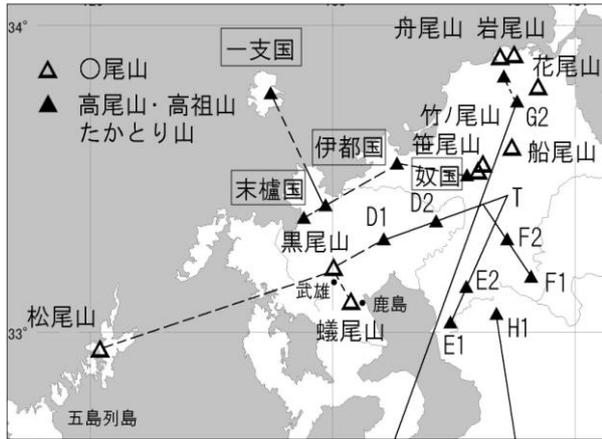


図6 北九州のたかとり山と○尾山

の「高雄山」がある。ここが「○雄山」となっているのは、経路の区切りのためである。これらのクニグニも大宰府付近で、本隊に合流したことが読み取れる。近くの米ノ山峠に笹尾山・竹の尾山を残して、合流後この峠を越えたことまで記録している。

その余のクニの参加は五島、武雄、鹿島に「○尾山」で記録している。「高尾山」でないのは、旁国としての区別であろう。

若松半島の岩尾山、舟尾山は遠賀川下流を指し示す。山名の頭をとった岩舟は上流にある船尾山とあいまって、東征の為の造船を記録している。船尾山の木の川出し地と思われる、遠賀川支流を訪ねると位登古墳があった。伊都国の人が配したのである。以上の事柄は、魏志が記す西暦二五〇年ころの後、神武東征が行われたことも分かる。

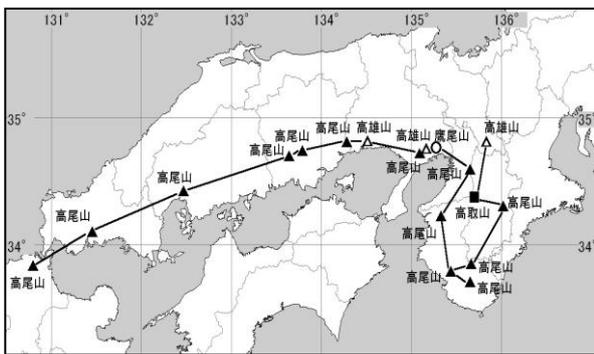
これまでの事柄から、神武東征が単なる領土拡大でなく、綿密な計画のもと行われた、建国の事業であることがわかる。また単に瀬戸内海を船で東進したのではなく、陸上隊とともに、あるいは後を追う筑紫や日向の人達とともに進んだ東征だったことが見えてくる。六年を要した歳月も理解できる。

「タカ」型の山が記録した東征

研究の途次であるが、判明したところを簡単に紹介する。

地図7は瀬戸内海をすすんだ、東征隊の本隊の足跡である。遠賀川畔に始まる高尾山の直列は特に、吉備に多くある。地図で確認願いたい。播磨との境に高取峠を名づけていて、意気高くすすんだ東征隊を想像できる。

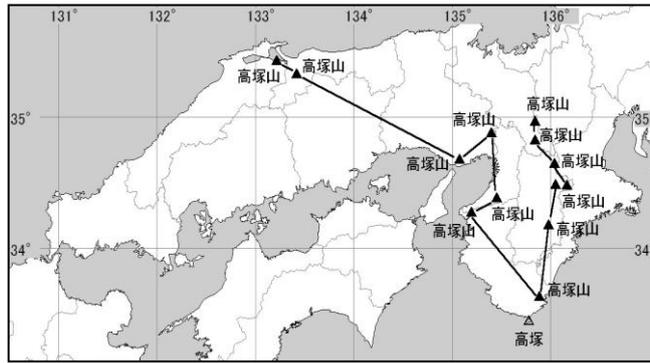
芦屋の鷹尾山は特別な「たかお」で難波の渡の出港の場所である。孔舎衛(くさへの)坂での戦いに敗れ、熊野に回ったことも記録している。東征の到達地点が宇治であることがわかる。この世界を



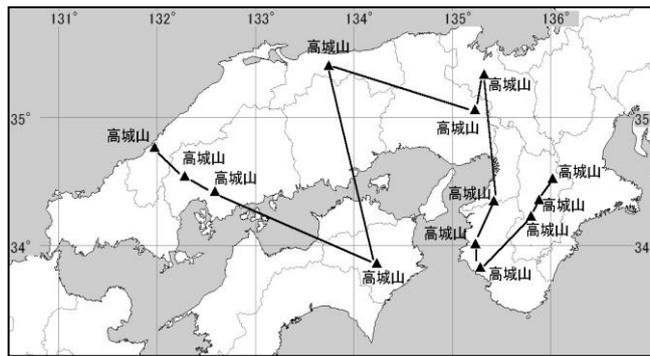
地図7 東征経路の高尾山

治めると東征最後の地点にふさわしい命名を行っている。

地図8・9は高塚山・高城山を結んだものである。いろいろな隊が西日本を隈なく言向けしていることがわかる。単に瀬戸内海を船で進んだのみでは、建国とはならないし、強力なヤマト王権が生まれるはずもない。



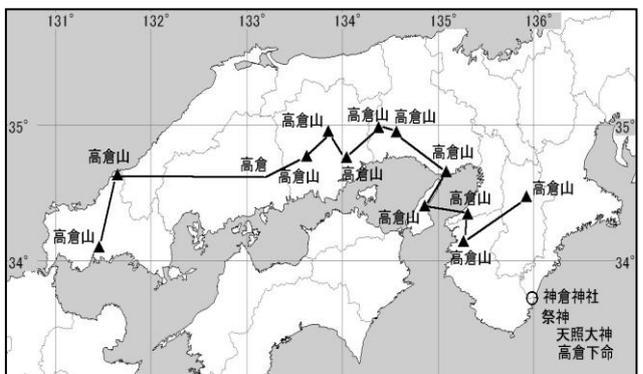
地図8 東征経路の高塚山



地図9 東征経路の高城山

地図10は高倉山の列である。山口市に始まり吉備では多くの高倉山を残している。高梁川、旭川、千種川畔にあつて川の安寧を祈った山であることが分かる。その先、戦いのあつた河内を避けて淡路島に迂回し和歌山、宇陀と進んでいる。宇治には高倉山を残していない。筑紫で神武兄弟に建国を託し、後を追った豊受大神の足跡と考える。

風土記の記録によれば東征後、摂津に進んだのち、神武の即位を見届けると、静かに身を引き、丹波で天照大御神に御饌を献する奉斎の日々を送ったのである。地図11は九州の高倉山である。朝倉の高倉山が天照大御神を祀る麻底良(またら)山を指し挟み、薩摩半島では邇邇芸命の足跡を指し示している。豊受大神は



地図10 東征経路の高倉山



地図11 九州の高倉山

吉備における東征の足跡

吉備における東征の足跡を地図12に示す。日本書紀は吉備国に高島宮の行館(かりのみや)をつくり、三年の間に船舶を揃え兵器や糧食を整えたと記す。高島の地名がいくつもあることから、高島宮はどこかと注目される。高島の地名は福山市から続き、海を行く本隊が転々と移動した痕跡と思われる。旭川を遡ったのだろう。岡山城の近くにも高島はあり、ここに天神山があることもうなずける。陸上隊の経路を推測すると、高尾山の直列に沿った経路となった。福山の天神

高天原の朝倉から、薩摩に出向き邇邇芸命に東征の報告と加護を祈り、後を追ったのだろう。祈りに満ちた建国だったことに感慨と誇りを感じ

る。後に豊鋤入姫命は、天照大神を祀る準備の為、元伊勢と呼ばれる神社を訪ねている。丹波、紀伊、吉備と豊受大神の旅を遡っているのは、豊受大神とともに遷宮を続けた天照大御神の御魂を求めてのことだったの

